NO.78

蓬左

HÔSA

『張州府志』　熱田陌図（部分）

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

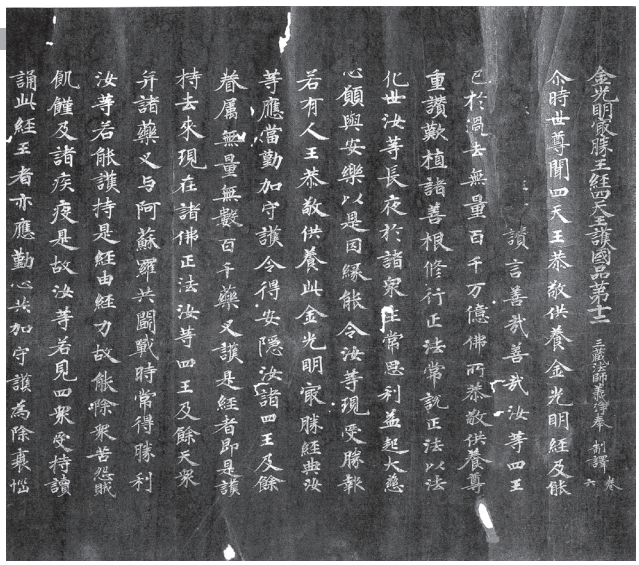
展示室1・2　徳川美術館（徳川美術館では4月11日(土)より開催）

書の名品をたずねて

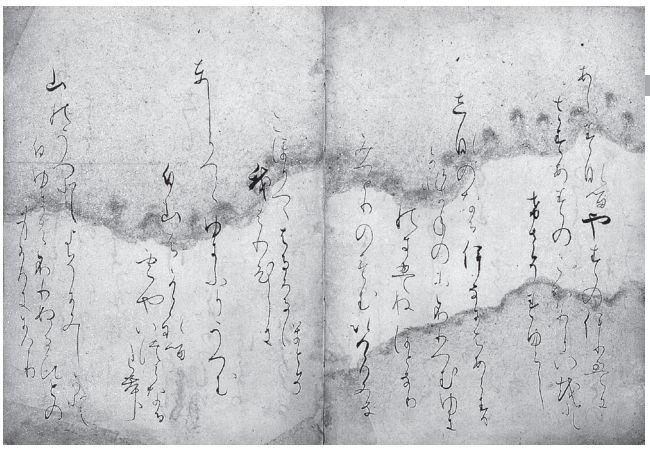
徳川美術館には、天平時代の写経、平安時代の仮名古筆、鎌倉・室町時代の名家筆蹟、桃山・江戸時代の武将の手紙、宋・元や室町時代の禅僧の墨蹟、あるいはこれらの断簡を貼り込んだ手鑑など数千点に及ぶ書の遺品が収蔵されています。その大半は尾張徳川家に伝来した品々であり、他の大名道具と同様、大名の生活のなかで欠くべからざる「道具」として、茶室に懸けられたり書院の床や棚に飾られたり、また婚礼に際しての調度本、あるいは藩主やその家族達の賞翫のために用いられてきたりと、多種多彩です。さらにこれらのコレクションに加え、岡谷家をはじめとする篤志家より寄託・寄贈を受けたり、購入した作品が含まれています。

今回は、平安・鎌倉時代の古筆の名品優品はもとより、懐紙や短冊、あるいは歌合の記録など詠賀の場での書、自分の気持ちや状況を伝えるための手紙にしたためられた書、篤い信仰に根ざした写経など、染筆するという行為や意識がその対象によって異なる点にも焦点を当て展示します。また所蔵者のご厚意により新出や初公開の作品を特別にご出陳いただく予定です。

重要文化財　紫紙金字金光明最勝王経（しし きん じ こんこうみょうさいしょうおうきょう）
巻第六　奈良時代　（徳川美術館蔵）

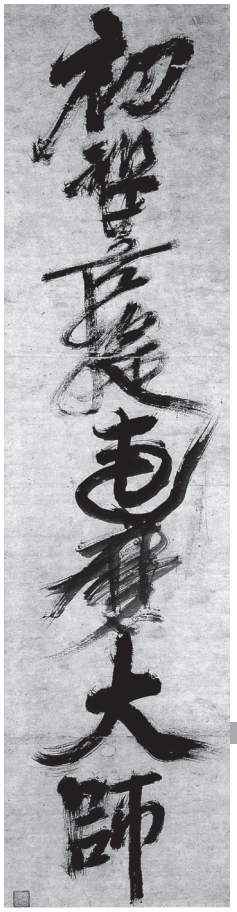


『金光明最勝王経』は、『法華経』『仁王経』とともに国家を鎮護する経典、すなわち護国三部経の一つとして、奈良時代から重んじられていた。この写経は天平13年（741）聖武天皇の発願によって、諸国に建立された国分寺の塔中に納入された、紫紙に金字で書写された『金光明最勝王経』の遺巻。本巻はいずれの国分寺に安置されていたかは詳らかではないが、鮮やかな紫色に染められた紙に、繊細な金界罫を引き、品位にみちた唐風の端正で謹厳な楷書で書写された、天平時代を代表する装飾経である。

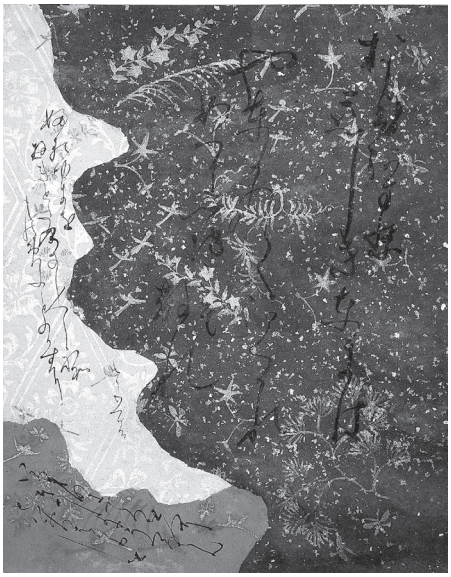


重要文化財
重之集（しげゆきしゅう）　伝藤原行成筆（ふじわらのゆきなり）　平安時代　（徳川美術館蔵）

三十六歌仙の一人源重之（生歿年未詳）の家集で、春・夏・秋・冬各20首、恋・恨各10首、および「かずのほかにたてまつれる」2首をあわせた102首の歌が収められている。雲母砂子を一面に撒いた淡い藍の打曇りのある料紙に、前半は歌を二行書き、後半は散らし書きにしている。書き初めから帖末にいたるまで、緩急抑揚が自在で流麗な筆致により、書写年代も11世紀半か、これをやや降る頃と考えられる。



重要美術品
石山切（いしやまぎれ）　貫之集下（つらゆきしゅう）　平安時代（徳川美術館蔵）



「石山切」は、天永３年（1112）３月に白河法皇の六十賀に際しての贈物として調進されたと推定される「本願寺本三十六人家集」のうちの「貫之集下」「伊勢集」の断簡をいい、昭和４年（1929）に分割されるに際し、本願寺がもとあった摂津の石山（現在の大阪城付近）にちなみ名付けられた。

王朝貴族趣味をあますところなく伝えてくれる華麗で美しい料紙に、優美な連綿の仮名で書写されており、12世紀初頭における宮廷の人々の「過差美麗」極まりない美の世界を今日に伝えている。

一休宗純墨蹟（いっきゅうそうじゅんぼくせき）　「初祖菩提達磨大師（しょそぼだいだるまだいし）」　室町時代　（徳川美術館蔵）

大徳寺第48世の一休宗純（1394~1481）は、奇行や風狂の所行から多くの逸話を生んでいるが、その禅風は辛辣を極め、当時の形式化した禅に反省をうながした。この一行書には、一休の不覇奔放で形式嫌いの性格を反映して、書法にこだわらない気概が強く感じられる。

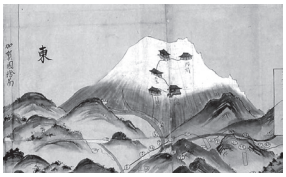
平成21年度展示スケジュール

4月8日～5月24日
春季特別展
書の名品をたずねて

5月27日～7月20日
七夕　―星にこめる願い―
近代の詩歌

7月23日～10月4日
徳川義直と儒教
絵図に描いた名山

以上の五つの展覧会については、本紙2～7頁をご参照ください。



10月7日～11月15日
秋季特別展
戦国ふぁっしょん　―武将の美学―

戦国時代を彩る武将の華美で奇抜な武具、華麗な衣服や絵画作品などから、戦国時代に花開いた多彩なデザインを紹介します。

11月18日～12月13日
目利きと鑑定

目利きとは、美術品の価値を判断する鑑定にあたります。古くからの鑑定にまつわる美術品を展示して、目利きの世界を紹介します。

幕末情報学

ペリー来航に代表される幕末国内・外の激動のなかで、情報収集に努力した人々の残した記録・絵図などを紹介します。

22年1月5日～2月14日
江戸の好古趣味

泰平の世の江戸時代に、古物に対する愛好が高じた様子を、絵画や工芸品などで紹介します。

島原の乱　―その攻略と陣形―

寛永十四年（一六三七）から十五年にかけて、天草地方で起きた一揆軍と幕府軍の戦いを伝える絵画が描かれました。多くの犠牲を出した戦いの様子の一端を絵画からみます。

22年2月17日～4月4日
尾張徳川家の宝物目録
―蔵帳にしるされた品々―

尾張徳川家では、蔵に収納された道具類は蔵帳に記載し管理されていました。蔵帳にしるされた品々をその記事とともに展示します。

江戸の歴史書

「徳川実紀」をはじめ江戸時代に編纂された歴史書を再評価し、近代の歴史研究につながる注目すべき成果として紹介します。

展示室1

七夕―星にこめる願い―

旧暦七月七日の夜、牽牛（彦星）と織女（織姫）が年に一度天の川を渡り、愛を語る七夕の伝説は中国で生まれました。奈良時代にはすでに日本にも伝わり、その後平安時代の宮廷儀式として発展しました。もともとは「乞巧奠」と呼ばれ、裁縫や機織りが巧みになるよう願う祭りでしたが、糸や絃にちなんで楽器演奏をはじめ諸芸学問などの上達を祈りました。供え物をして、香をたき詩歌管弦を楽しみました。江戸時代、幕府は雛祭りとおなじく五節句の行事の一つとし、民間にも普及しました。七夕と星にちなむ絵画や工芸品、物語文学に焦点をあてます。

七夕蒔絵手箱　室町時代　（徳川美術館蔵）

蒔絵の小箱で、もとは香木を納めた伽羅箱であったのかもしれない。蓋の表には帆船が風を受けて波間を走る情景が描かれており、船中には水夫や乗員六人、空には千鳥が群れをなして飛んでいる。蓋を開けると懸子があり、秋草、牽牛・織女の二星、角盥の水に二星の影を映して描かれている。角盥は水をいれて七夕の祭に供えられる。蓋の表に描かれた帆船は、天の川を渡る物語に発想を得た図であろう。蓋の裏、身の見込みにも古歌の文字の一部が散らされており、室町時代の公家の繊細な趣向が盛り込まれている。

千代田之大奥　七夕　明治時代（徳川美術館蔵）

江戸城での七夕は、明治になっての聞き書きである『千代田城大奥』（明治 25・1892 年刊）によると、将軍の御座間の縁側に白木の台を据え付けて、四隅に笹竹を立てた。しめ縄をはり、灯明を灯し瓜・西瓜・桃・菓子などを山盛りに供えたという。将軍の夫人は、白の帷子に付帯、腰巻を着た。二星が逢う歌を詠み短冊にしたため、侍女達も色紙や紅白の造花を笹竹に飾った。

展示室2

近代の詩歌

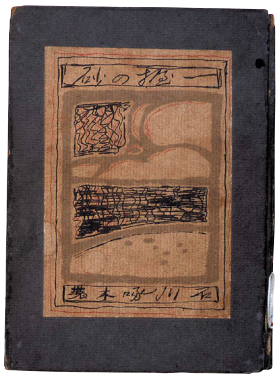
雑賀重良氏（一九〇〇～八三）は、和歌書の収集研究家として著名でした。その没後にご遺族から蓬左文庫に寄贈された旧蔵書は、一八、二〇〇点に上ります。今回の展示は、その中から、近代の著名な詩歌人の詩歌集を中心に展示します。

明治維新後も、江戸期に引き続き「古今和歌集」を理想として平易な和歌作りをした香川景樹（一七六八～一八四三）の流れ（桂園派）の隆盛が続きましたが、明治中期に正岡子規（一八六七～一九〇二）らの短歌革新運動が起き、近代短歌に変化していきます。

正岡子規の結成した根岸短歌会では伊藤左千夫（一八六四～一九一三）、長塚節（一八七九～一九一五）が活躍し、その流れはアララギ派に引き継がれます。同派は大正期に入っても島木赤彦（一八七九～一九二六）、斉藤茂吉（一八八二～一九五三）らが活躍します。また、与謝野晶子（一八七八～一九四二）、北原白秋（一八八三～一九四二）らの浪漫主義的な流れ、土岐哀果（善麿、一八八五～一九八〇）、石川啄木（一八八六～一九一二）らの、現実生活に目を注いだ生活派の流れなどが注目されます。

伝統的な和歌や漢詩に対して、欧米の翻訳詩の影響を受けて明治十五年（一八八二）以降新体詩が成立しました。文語体でたいていの場合七五調が使われました。やがて口語体の詩も作られるようになります。

こうした近代詩歌人の詩歌集の初版本などは、表紙絵や装丁などに時代を反映した特色が現れており、味読するに堪えるものがあります。



同左『一握（いちあく）の砂（すな）』
明治43年（1910）

石川啄木著『悲（かな）しき玩具（がんぐ）』
明治45年（1912）

源氏物語の世界

平安時代に紫式部によって著された『源氏物語』は、その成立以来連綿と読みつがれてきた、日本を代表する古典文学です。光源氏を中心とするさまざまな登場人物が織りなす数々のドラマ、物語の背景となっている王朝世界は、今なお多くの人々の心を惹きつけています。

『源氏物語』は、各時代を通じてさまざまな写本によって読みつがれ、数多く著された梗概書、注釈書からは、人々の関心の高さが伺えます。また、「源氏絵」と呼ばれる絵画や、工芸品の意匠においても、重要な主題として享受されてきました。特に、尾張徳川家ゆかりのこの名古屋の地には、国宝「源氏物語絵巻」、国宝「初音の調度」（徳川美術館蔵）のほか、重要文化財「河内本源氏物語」（蓬左文庫蔵）など、『源氏物語』に関する貴重な作品が伝えられています。

本年度も、特別展を除く期間に、蓬左文庫展示室1にコーナーを設け、書籍、絵画、工芸品など、『源氏物語』にちなむさまざまな作品を取りあげながら、千年もの長きにわたり人々に愛されてきた、『源氏物語』の世界を紹介していきます。

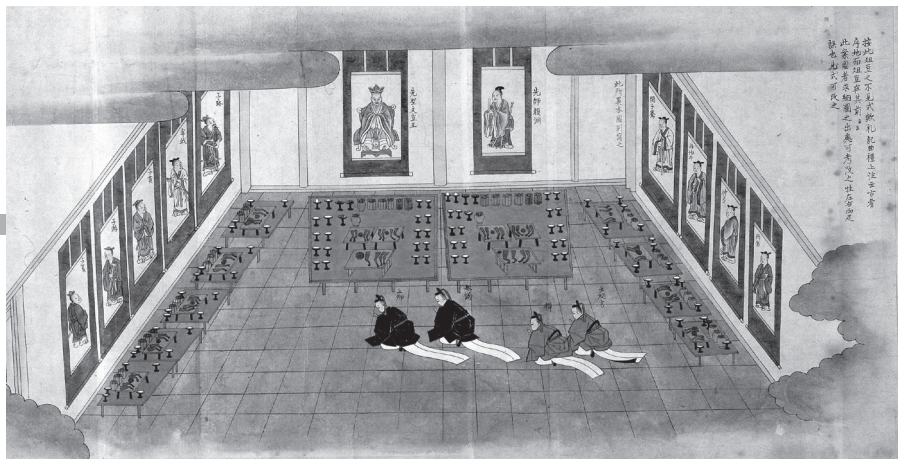
展示室1

徳川義直と儒教

義直は学問を重んじ、中でも儒学に傾倒しました。日本で初めての聖堂を上野忍岡の林家の私邸に建て、名古屋城二の丸庭園にも尾張徳川家の聖堂を他藩に先駆けて設けています。歿後の廟も瀬戸市定光寺に儒式により、建立されています。儒教に基づいた著作も多く、旧暦二月・八月の上の丁(ひのと)の日に孔子と孔門十哲の画像を掲げてまつる儀式、釈奠(せきてん)も行いました。聖堂に掲げられた額や儀式の祭器、釈奠に関する資料などを一堂に展示します。

黄金造儒教聖像(こがねづくりじゅきょうせいぞう)　牡丹蒔絵厨子入(ぼたんまきえずしい)り
江戸時代前期　(徳川美術館蔵)

名古屋城二の丸庭園内の聖堂に安置された「堯・舜・禹・周公・孔子」の五像と厨子。厨子の扉裏に聖人の出現を象徴する鳳凰と麒麟が金貝で施されている。



釈奠(せきてんず)図(部分)　江戸時代
(徳川美術館蔵)

徳川義直は寛永10年(1633)に、それまで廃れていた孔子を祀る釈奠の再興を図った。

展示室2

絵図に描いた名山

絵図は古い時代から書き継がれていますが、全国的な規模で、また、統一した規格で描かれるようになったのは、江戸時代にはいってからです。国絵図は、幕府の指示により四度(慶長年間、正保年間、元禄年間、天保年間)描かれています。四度のうち、日本全国六八ヶ国を網羅した絵図は、正保年間の国絵図が最初といわれています。

正保国絵図は、隣国との国境に整合性を持たせるために、幕府からの細かな指示によって、全国的統一化を図って製作されました。これ以後の国絵図製作にあたっても、その指針は踏襲されていきました。提出した諸国でも、製作した

越中国図(えっちゅうのくにず)(部分)　江戸時代

屏風のようにそそり立つ秋の立山(雄山神)を描く。

国絵図の控え、あるいはその写しが国元にも残され、国政に利用したと思われます。

国絵図の外にも交通網の整備に随い、街道、海路図など各種の絵図が製作されるようになりました。目印となる山々、河川などを加え描くことで、利用者の便に応え、印刷され頒布されるようになりました。

このように描かれた種々の絵図には、人々の信仰の対象となっていた霊山、社寺などを描き加えてある絵図も多々みられます。

特に霊山は国境に在り、図中でも際立たせて描くことで、国のシンボルとして、また、信仰上からの特徴をもって描かれていました。信仰の対象であった山々、特に富士山・白山・立山の三霊山を中心に、江戸時代の人達は、山々に思いをよせたのでしょうか。

甲斐国図（部分）　江戸時代

山梨県側から見た雪をかぶった晩秋の富士山、麓には富士五湖が見える。

エントランスホールのご案内

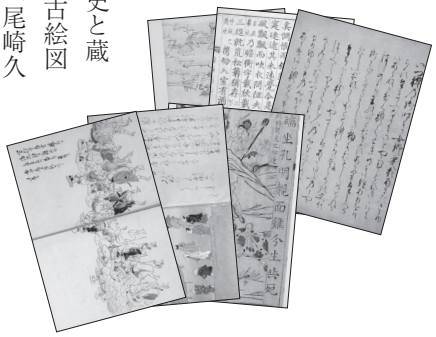
蓬左文庫の入口、エントランスホールの建物は、旧書庫を再利用したものです。もともとは、明治期に建てられた土蔵で、その後移築改修され、昭和二十五年から五十八年までは書庫として用いられました。平成十六年の新館オープン時に、西向きから北向きに九十度回転させ今の位置に移動し、エントランスホールとして整備いたしました。二階部分は、書庫の姿をそのまま残し、一階からその様子を見ていただけるようになっています。

またホール内では、少しではありますが、展示もしています。代表的な蔵書「続日本紀」などのレプリカや、その時々の話題になっている事に関連する資料を展示しています。不定期に展示替えをしておりますので、展示室・閲覧室のご利用の際には、こちらの展示の方もご覧ください。

その他には、モニターが一台あり、展示室内にある「デジタル御文庫」の「徒然草」「源氏物語」など

蓬左文庫の主な蔵書についての紹介映像を順次流しています。

また、出版物等の販売もここでしております。蓬左文庫の歴史を蔵書によって紹介した『蓬左文庫―歴史と蔵書』、漢籍、国書、古文書古絵図と分けた所蔵図書目録、尾崎久弥、堀田家、蟹江慶次郎、雑賀重良等各コレクション別の蔵書目録、主要な図書の解説をしている『善本解題図録』、さらに所蔵の古地図の複製も十三種類ございます。「古地図」は郵送での販売はしておりませんので、直接エントランスで現物をご覧になってお買い求めください。



他には、かなり以前に出版されたものですが、『名古屋叢書三編』全二十冊もご購入いただけます。正編、続編は、正編の『索引・総目録』しか在庫がありませんが、三編は、各冊ともまだ在庫がございます。

販売グッズとしましては、尾張徳川家初代義直の蔵書印「御本」の印影を刻んだ「ペーパーウエイト」や、蔵書から図柄をとった「絵はがき」（カラー六枚入り）もございます。

これら出版物等は古絵図を除き郵送でも販売しておりますので、詳細はホームページの「刊行物」の欄をご覧ください。

絵図の街かど

表紙の「熱田陌図（はくず）」は、宝暦二年（一七五二）に尾張藩により編纂された、尾張国の地誌『張州府志』（蓬左文庫蔵）の附録図の一つである。

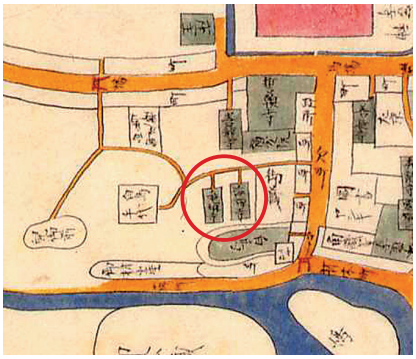
「御殿」と記された尾張藩東浜御殿の対岸にあたる片町に「海禅院古ヤシキ」「龍珠院古ヤシキ」とある記載に注目していただきたい。それぞれ方形の区画のなかの、方形の地割の呼称として記載されたものだが、さらに両者の間の小路の呼称として「海禅院入」が記載されている。これらは、熱田加藤氏ゆかりの寺院の故地を示す貴重な記事といえる。

熱田加藤氏は、源頼朝に仕えた鎌倉幕府御家人加藤景廉の子孫と伝えられるが、熱田で有力になったのは図書助景繁（法名文周、一五二九年没）の代である。熱田龍珠寺開山である南溟紹化和尚の語録のなかで、景繁は大船で遠方に航海し、サンゴを取引したと述べられている。南海交易で巨富を得た景繁は、熱田の海浜にある片町に寺院（のちの海禅院）を建立した。

景繁の子が図書助順光（一五四七年没）・隼人佐延隆（法名全朔、一五七一年没）兄弟で、東・西両家に分かれたが、ともに熱田が港町・宿場町として発展する大きな役割を果たした。加藤延隆（西加藤家初代）は、西の大瀬子に屋敷を構え、海禅院の西隣に南溟紹化和尚を招いて龍珠院（のち龍珠寺）を開いたのである。

西加藤家が江戸時代に入って屋敷を東脇へ、さらに旗屋町へ移転させるとともに、海禅院・龍珠寺の両寺は、北へ移転し（左写真参照、円内）、町場となった故地には旧来の呼称のみが残った。しかし、熱田加藤氏が熱田の海浜にある片町を揺籃の地として発展を遂げたことを示す貴重な伝承ということができる。

江戸時代に描かれた絵図からは、当時の状況はもちろん、「熱田陌図」のように、遠く過去に遡るための手がかりが得られる場合がある。



『張州府志』　熱田陌図（旗屋町付近）

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023　名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174
ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

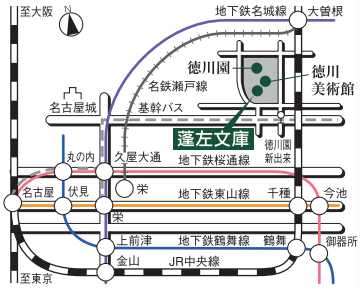
■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【市バス】名古屋駅バスターミナル（テルミナ2F）グリーンホーム7番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分
【名鉄バス】名鉄バスセンター（メルサ3F）4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分
【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分　桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分



■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分　120円）をご利用下さい。

ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日のときは直後の平日）　5月7日（木）、9月24日（木）は臨時開館、8月10日（月）は展示室のみ臨時開館します。
12月中旬～1月3日　※催事により変更することがあります。

■展示室／有料　一般：1200円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）
【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。
【閉架図書】午前9時30分～午前12時　12時45分～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第78号　☆平成21年4月8日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）
※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

nagoya 400th 2010 名古屋開府400年